

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02678

研究課題名（和文）現代ドイツ語の書き言葉における現在完了形の使用実態に関する計量的研究

研究課題名（英文）A Quantitative Analysis of Present Perfect in Contemporary German

研究代表者

今道 晴彦（Imamichi, Haruhiko）

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40758182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ドイツ語の新聞記事における冒頭部分（リード）の動詞の統語形式および時制形式を計量的観点から分析した。その結果、冒頭部分では、一文目で新情報を現在完了形で述べて、二文目、三文目でその詳細を過去形で語る表現パターンが主流となる一方、社会的出来事を扱う新聞記事では、他の記事内容に比べて、そのパターンが豊かであることなどが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で実施した実証的調査は、新聞記事の見出しおよび冒頭部分における動詞の振る舞いに関する従来の知見を裏付けるひとつの客観的資料になるものであると同時に、これまで指摘されていない新たな傾向を示した点において、意義があると考えられる。また、本研究で示した調査結果は、ドイツ語の新聞読解学習を行う上での基盤に繋がるものであり、教育的意義を有するものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to analyze the verb form in the title and lead of German newspapers from quantitative view. The results of the analysis indicated that in the first sentence the present perfect form is mostly selected for the description of new information, and that in the second and third sentence the past tense is used in order to give a detailed description. However, from these results we confirmed that there are some articles, which enrich the verb form pattern.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：時制形式 現在完了形 過去形 ドイツ語 新聞記事 コーパス

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) ドイツ語にはかつて現在形と過去形の2つの時制形式しかなかった時代があったが、現在は6つの時制形式が認められている。時制数の増加は完了形の登場によるもので、完了形の出現は従来の時制形式に大きな変化をもたらした。よく知られているのが、現在完了形による過去形の侵食で、今日では過去の出来事や体験について言及する場合、話し言葉ではもっぱら現在完了形が選択されるのに対して、書き言葉では過去形と現在完了形の両時制が並存しており、とりわけドイツ語学習者にとっては、それらの使い分けが問題になる。この問題を巡っては、音声、形態・語彙、意味、文体などの面で研究がなされてきた。

(2) とくに知られているのが、新聞記事などの冒頭（導入）部分で見られる現在完了形と過去形の使い分けである。これは、はじめに現在の立場から過去を概観するために現在完了形が選択されて、次に個々の出来事を時系列で追うために過去形が使用されると考えられている。しかし、一方で、客観的裏付けがなされているわけではなく、そもそも、そうした現象が実際にどの程度見られるのかについてはよくわかっていない。

(3) 使い分けの実態を客観的に把握することは、新聞読解学習を進めて行く上で、重要な課題のひとつになる。そのためには、ドイツ語の新聞データを用いて、実証的に検証することが不可欠であり、「媒体（例：新聞記事、テレビ・ラジオのニュース放送）」、「新聞記事の種類（例：高級紙、大衆紙）」、「新聞記事の内容（例：社会面、経済面、スポーツ面）」、「情報構造・文章構成（例：新情報、詳細、背景、情報元）」、「年代」などの変数を加味して、使用実態を探っていくことが検証を進めていく上でのひとつの出発点になると考えられる。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、このうちの3つの項目に絞って検証を行う。具体的には、以下の問題に関してデータを手掛かりに計量的観点から分析を行い、新聞読解学習に資する客観的知見を提示することを目的とする。

- (A) 新聞記事およびテレビ・ラジオのニュース放送の冒頭部分での時制形式
- (B) 新聞見出しの統語形式および時制形式における時系列変化
- (C) 新聞記事の冒頭部分における文章構成と時制形式との関係

3. 研究の方法

(1) (A) の「新聞記事およびニュース放送の冒頭部分での時制形式」については、ドイツ通信社（DPA）およびフランス通信社（AFP）による2種の新聞記事と、ドイツのテレビ放送（Deutsche Welle）および公共ラジオ放送局（Deutschlandfunk）によって配信されたニュース放送の公開スクリプトをデータとして、①一文目の時制形式、②冒頭部分の時制配列パターン、③動詞による差などを探る。

(2) (B) の「新聞見出しの統語形式とおよび時制形式における時系列変化」については、ドイツのハンブルクを拠点とする有力紙 Die Zeit 紙の1950年以降の新聞記事をデータとして、①見出しの統語形式の時系列変化と、②見出し文の時系列変化を調査する。その際、文構造や品詞情報（品詞については、品詞タグ付ソフト TreeTagger を利用して各見出し（文）を形態素に分類し、品詞情報を付与する）を収集し、時の経過と共に何がどのように変化しているかを、コレスポンデンス分析という統計手法を用いて検証する。

(3) (C) の「新聞記事の冒頭部分における文章構成と時制形式との関係」に関しては、同じく Die Zeit 紙の社会面、経済面（株価）、スポーツ面から直近に生じた出来事を話題にした新聞記事を取り出し、文章構成と時制形式との関係を、上述のコレスポンデンス分析を用いて探る。

4. 研究成果

(1) (A) の「新聞記事およびニュース放送の冒頭部分での時制形式」については、新聞記事に限らず、テレビおよびラジオのニュース放送においても、冒頭部分の大半は現在完了形で始まり、過去形が続いており、この配列パターンが定石になっていることがデータによって裏付けられた。とくにニュース放送に関しては、他の時制で始まる事例が確認されず、新聞記事に比べると、臨場感を与えることがより意図されている可能性が示唆された。また、「コピュラ（sein, werden）」、「所有（haben）」、「存在（es gibt 存在文での geben）」、「知覚（sehen）」、「意志（wollen）」、「進行・継続（weitergehen）」などは冒頭では現在形が選択されており、動詞によって時制形式の選択が異なる可能性が確認された（図1）。

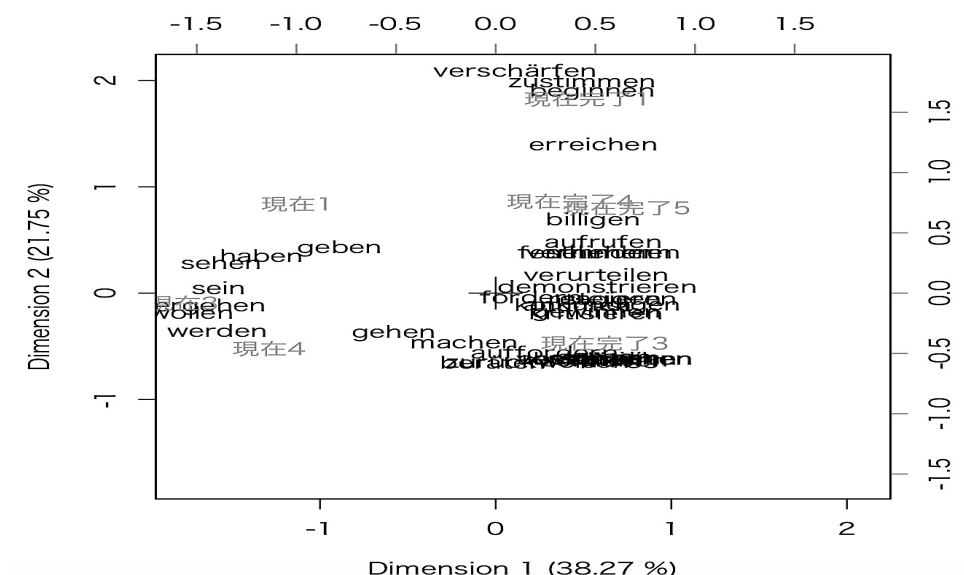


図1 スコア散布図（時制配列と動詞頻度の関係）

(2) (B) の「新聞見出しの統語形式とおよび時制形式における時系列変化」については、まず、分析対象とするすべての年代で「語句」による表現が見出しで優勢であることが判明した。しかし、語句は減少傾向を示す一方で、「文」による表現が1990年以降増え続けており、ここ最近はその傾向が強まることが確認された（図2）。

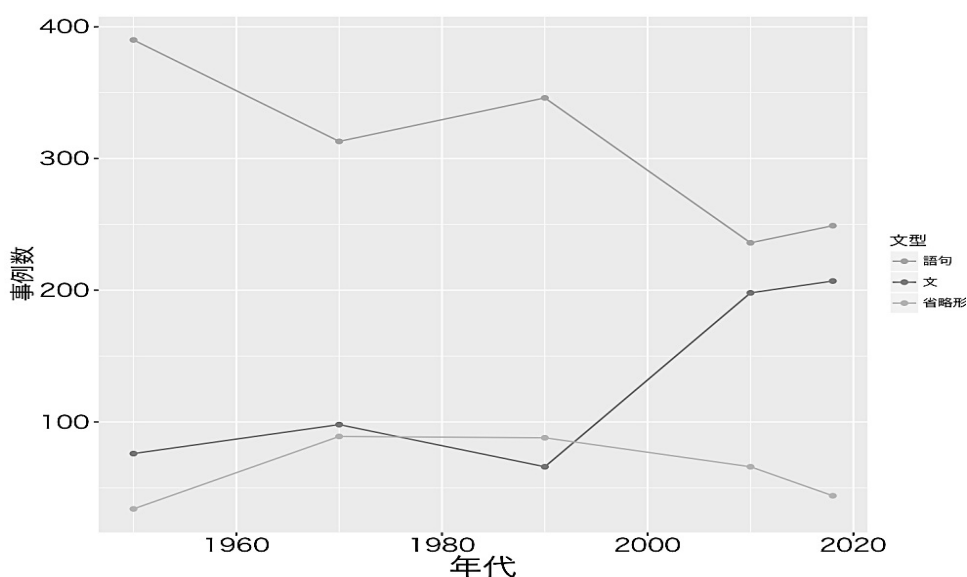


図2 Die Zeit 紙における見出しの統語形式の推移

その要因を文構造や品詞の使用に求めることができなかったが、1990年当初は、「冠詞類（不定冠詞、定冠詞）」を伴う名詞が主語となる文が見出しで用いられるのに対して、ここ最近では、「人称代名詞（*du*, *ich*）」、「指示代名詞」、「疑問詞」、「引用文」などの使用が顕著に見られた（図2）。このことから、見出しにおける表現の多様化が進むと共に、ニュース当事者の発言の引用や疑問文など、読者により訴えかける記述に変わりつつあることが示唆される。

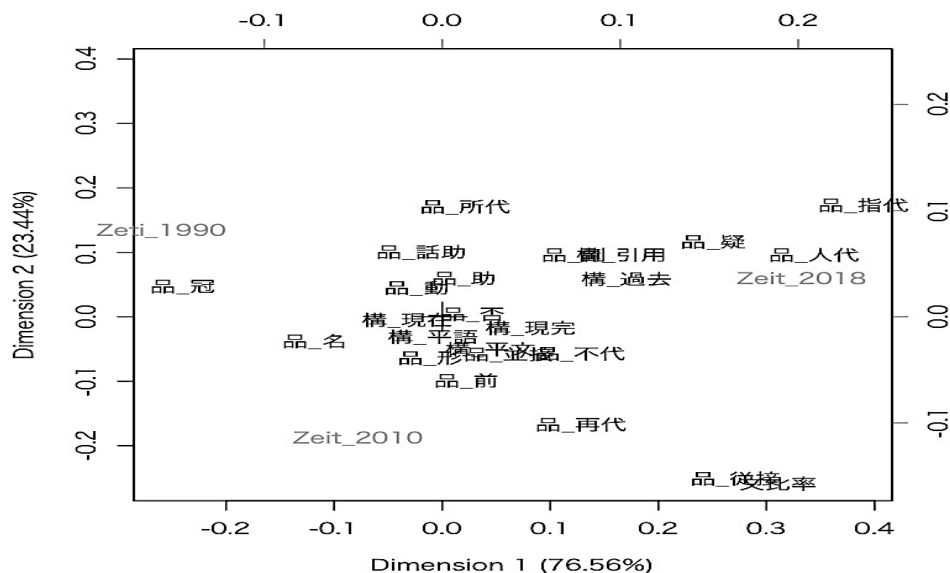


図3 スコア散布図（年代と文構造・品詞頻度の関係）

(3) 最後に、(C)の「新聞記事の冒頭部分における文章構成と時制形式との関係」については、1文目は「現在完了形」、2文目は「過去形」、3文目は「過去形」で表現されるパターンがほとんどで、その際、先行研究の指摘（Wolf, 2017）とは異なり、1文目では「新情報」、2文目では「詳細」、3文目では「詳細」について言及するパターンが優勢であることが観察された。また、「記事内容」に関する特徴として、「社会面」、具体的には、「社会的出来事」を扱う新聞記事では、「情報元」について言及する事例が多いことや、時制形式のバリエーションが豊かで、「現在形」ではじまる事例や、2文目、3文目で「背景」について言及する際に「過去完了形」が用いられる事例が見られることなどが確認された。

(4) 以上の分析により得られた結果は、新聞記事の冒頭部分の動詞の時制形式に関する従来の指摘を補完する客観的資料となる一方で、これまで指摘されてこなかった新たな言語現象や言語変化を示唆する基礎的資料になると言える。

(5) 一方で、本研究で行なった分析には、用いた資料の種類および量などにおいて制約もある。したがって、ドイツ語の新聞記事全般に該当するかどうかのさらなる検証が今後の課題になると言える。

<引用文献>

- ① Wolff, V., *Zeitungs- und Zeitschriftenjournalismus*, Köln: Herbert von Halem Verlag, 2017

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 373/374
2. 論文標題 現代ドイツ語における時事テキストにおける冒頭部分の動詞形式について－文章展開とどの程度関連があるのか－	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 21
2. 論文標題 文章読解におけるキーワード・トピックセンテンスの理解と要約文作成力との関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ドイツ語教育	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi.org/10.24670/deutschunerricht.21.0_45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 400
2. 論文標題 現代ドイツ語の派生形容詞をつくる接尾辞-lichの通時的変化について－コーパスに基づく計量的概観－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 414
2. 論文標題 ドイツ語の新聞記事における見出しの変遷に関する計量的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 435
2. 論文標題 ドイツ語の新聞記事における文章構成と時制形式について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今道晴彦	4. 巻 160
2. 論文標題 現代ドイツ語の接尾辞使用とテキストジャンル形容詞をつくる接尾 辞を例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 220-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 今道晴彦
2. 発表標題 ドイツ語を科学する
3. 学会等名 平成29年度広島大学公開講座
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今道晴彦
2. 発表標題 現代ドイツ語の派生形容詞をつくる接尾辞-lichの通時的変化について
3. 学会等名 統計数理研究所公開セミナー「言語と統計2018」
4. 発表年 2018年

1．発表者名 今道晴彦
2．発表標題 ドイツ語の接尾辞使用とジャンル差・文体差について：新聞・字幕・ブログコーパスに基づく計量的分析
3．学会等名 統計数理研究所言語系共同研究グループ夏季研究会
4．発表年 2018年

1．発表者名 今道晴彦
2．発表標題 ドイツ語の新聞見出しとその変遷について
3．学会等名 統計数理研究所合同研究発表会『言語と統計2019』
4．発表年 2019年

1．発表者名 今道晴彦
2．発表標題 現代ドイツ語における接尾辞の生産性と文体差について：コーパスに基づく計量的概観
3．学会等名 日本独文学会春季研究発表会
4．発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----